

《研究論文1》

日本語の言語類型論的特徴がモダリティに及ぼす影響 —グローバル時代に求められる総合的日本語教育のために—

森 山 新*

1. はじめに

第二言語教育において、その言語の文法的、語彙的な特徴や学習者の母語との差異について言及するのは至極当然のことである。しかし最近、文化や把握のしかた（パースペクティブ）、発想の違いなど、これまであまり問題にされてこなかった違いなどが、日本語教育をはじめとした第二言語教育において、教えるべき内容として取り上げられることが少なくない（井上2002）。それは、それぞれの言語にはそれを支える文化やパースペクティブ、発想があり、それを理解することで、その言語に見られる種々のことがらを有機的に理解することが可能になると考えられるようになってきたためである。

また今日のような人と人とが国境を越えて交わり、第二言語（外国語）を介してのコミュニケーションが日常的に行われるグローバル時代にあっては、単に文法や語彙といった言語面の理解だけではなく、その背景に存在する文化やパースペクティブ、発想の違いをも考慮に入れないと、コミュニケーションに様々な誤解や摩擦をもたらすことになる。したがって日本語教育でも、このような非言語的な側面にまで学習者に気づきを促すことができる総合的な言語教育が求められている。

本稿で扱うモダリティ表現もその一つで、単に文法や語彙という次元ではとらえることができない、言語類型論的特徴が反映したパースペクティ

ブの違いが関与しており、言語教師は学習者に対し、それらに対する気づきを促すことが求められる。

日本語はモダリティ表現が発達した言語であり、学習者はその習得に苦勞するとされることがある。しかし日本語のモダリティ習得が困難な原因は、単にその表現が多様なためだけではなく、以下に示すように、日本語のモダリティが他の言語とはやや異なった把握のしかたをし、それが言語類型論的な特徴となっていることも大きな原因となっている。

本稿ではグローバル時代に求められる「総合的日本語教育」を模索する研究の一環として、日本語の言語類型論的特徴が日本語のモダリティ表現に及ぼす影響について考察する。

2. 客観的把握・主観的把握

モダリティとは外界の事態に対する話し手の心的態度を表す。したがってモダリティ表現には話し手が外界の事態にどのように対し、とらえるかといったパースペクティブが密接な関わりを持つてくる。

人は自身をとりまく外界の事態をとらえ、表現する際に、「話し手自身の見え（視点）」からそのまま主観的に外界の事態をとらえ、表現すること（主観的把握）もできるが、話し手自身の見えを離れて中立的、客観的な視点から外界の事態をとらえ、表現すること（客観的把握）もできる（池上2000）。例えば図1は「話し手（私）がある女

*お茶の水女子大学大学院、比較日本学教育研究センター長



図1 「私が女性を描く」事態の主観的把握と客観的把握（森山2008）

性を見、その女性を描く」場面を主観的に把握した場合と、客観的に把握した場合とを描いたものである。両者を比べると、主観的把握の場合は「話し手」が視野から外れているが、客観的把握の場合には「話し手」は客体化され、視野に含まれている点などが異なっている。

また言語はそもそも、「自身の思考の手段」としての認知的道具としての側面と、「他者とのコミュニケーションの手段」としての社会的道具としての側面とがある。言語を自身の思考の道具として使うには、自身からの見えをそのまま言語化したほうがよいわけで、「主観的把握」のほうが都合がよく、コミュニケーションの道具として使うには、自己中心的な視点ではコミュニケーションに支障が生じる可能性があり、他者にもわかりやすい中立な視点である「客観的把握」のほうが都合がよい。

このように言語には道具として2つの機能を有しているが、両者の把握のしかたには食い違いが生じるため、それぞれの言語において、どちらを優先するかを選択をせざるをえず、その違いがしばしば言語表現に大きな差異となって現れる。

たとえば(1)は川端康成の『雪国』の有名な冒頭の一文である。(1)では主人公にとっての「私からの見え」がそのまま言語化されている。日本語はこの例に限らず、一般的に「主観的把握」をすることが多い。

(1)国境の長いトンネルを抜けると雪国だった。

ところが、この一文を英訳版（E. Seidensticker 訳）で見ると、以下の(2)ようになる。

(2) The train came out of the long tunnel into the snow country.

(2)では(1)とは異なり、「客観的把握」での描写がなされている。すなわち英語では客観的把握をする傾向がある。

このように日本語では、言語の「自身の思考の手段」としての側面を重視した「主観的把握」を行う傾向を持ち、英語では「コミュニケーションの手段」としての側面を重視した「客観的把握」を行う傾向を持っていることがわかる。

3. 〈スル〉的言語・〈ナル〉的言語

一方、池上（1981、1982）によれば、以下のように日本語は〈ナル〉的言語、英語は〈スル〉的言語であるといわれる。

日本語は、〈出来事全体〉を捉え、事の成り行きという観点から表現しようとする傾向が強い〈ナル〉的な言語である。一方、英語は、出来事に関与する〈個体〉、とりわけ〈動作主〉としての〈人間〉に注目し、それを際立たせるような形で表現しようとする傾向が強い〈スル〉的な言語である（池上1982）。

前節の「把握のしかた」との関連で言えば、日本語では「話し手の視点」から外界の事態をとらえ、その外界という場で「何が起こったか」「ど

うなったか」といった描写となり、〈ナル〉的な把握になりやすいわけである。これに対し、英語は、外界の事態をある特定の視点からながめることはせずに、中立的、客観的な視点からものごとをとらえようとする。その結果、外界の事態のある特定の参加者に注目し、その参加者が「何をしたか」「どうしたか」を描くことになるため、〈スル〉的な把握になりやすい。

具体的な例を挙げると、たとえば英語のヴォイス（能動態・受動態）は、図2（上段）のように、外界の事態の「どの参加者に注目するか」で決まり、動作主に注目すれば能動態、被動作主などに注目すれば受動態となる。

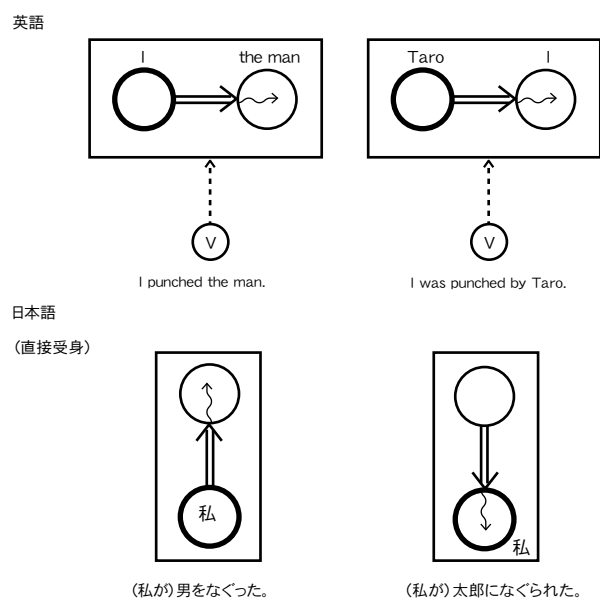
これに対し日本語では、図2（下段）のように、「話し手（私）と外界との関係」においてヴォイスの用い方が決まり、一義的には話し手が外界に働きかける事態を表すのに用いるのが能動態であり、外界により話し手が何らかの被害や迷惑などを被る事態を表すのに用いるのが受動態である（森山編2008、森山他近刊）。

このように外界の事態を言語化するには「客観

的把握」か「主観的把握」かという2通りの把握のしかたがあり、言語によってどちらを優先するかはそれぞれの言語が持つ類型論的特徴全体を左右する。英語が〈スル〉的把握、日本語が〈ナル〉的把握をする傾向があるのも、これらの把握のしかたが影響しているわけである。

4. デオンティック型言語・エピステミック型言語

以上、英語が「客観的把握」、日本語が「主観的把握」をすることによってもたらされた両言語の言語類型論的な特徴をいくつか述べてきた。この把握の主観性はさらに、外界に対する「把握の内在性」へと発展する。日本語のように「話し手からの見え」で外界を把握しようとするれば、それは「外側からの見え」、すなわち「外在的 (extrinsic) な把握」となり、その結果「他者の心の中」のような、外側からは見えないものはあくまで推量的な描写となったり、表面的な描写とならざるをえない。これに対し英語のように「話



し手からの見え」にとらわれない把握では、外見にとらわれず、秘めた部分をも見抜いて表そうとする把握、すなわち「内在的 (intrinsic) な把握」をするようになる。このような「把握の内在性」の違いは、日英のモダリティ表現の言語類型論的な差異となって現れる。

モダリティ形式には「デオントリック (deontic) 用法」と「エピステミック (epistemic) 用法」とがある。デオントリックなモダリティ用法は、事態に内在する潜在的可能性の実現を見抜き、主語 (動作主) がコントロールするものとして内在的に把握するものである (Biber et al. 1999) のに対し、エピステミックなモダリティ用法は、事態を外側のある視点 (話し手の視点) から認識的に把握する、言い換えれば話し手の認識によって外側からコントロールしようとする用法である。

英語のように「客観的把握」をする傾向のある言語では、モダリティをまず内在的に把握する傾向がある。例えば *must* は「法律的・道徳的観点から見た行為の内在的な必然性」を表したものであり、*may* は「法律的・道徳的観点から見た行為の内在的な可能性」を表したものである。これらにおいて、その事態は「主語 (動作主) が直接コントロールするもの」として内在的にとらえている。

このように、英語のような客観的把握をする傾向のある言語では、事態の成立をできるだけ客観的にとらえようとし、外界の事態内に内在する力関係 (動力連鎖) としてとらえようとする。そのため、内在的な把握が無標の把握となり、あえて「話し手の視点」に立ち、表面的で認識的に表現する把握のしかたは有標となる。したがって英語では「話し手の視点」から事態を外在的にとらえるエピステミックな把握は有標な表現となる。

このようにデオントリックなモダリティ用法とエピステミックなモダリティ用法とは、外界の事態を内在的に把握するか、外在的に把握するかという、2つの把握のしかたが関わっている。そし

てそれらの違いは事態を客観的に把握するか、主観的に把握するかというそれぞれの言語の類型論的特徴にも深く関係している。上述したように言語には思考の手段、コミュニケーションの手段という2つの役割があり、それゆえに2通りの把握が選択される。しかし両者は事態把握の両面であるものの、表面的には二律背反のとらえかたであるためにどちらかを優先せざるを得ないことから、言語によりどちらかを無標のとらえ方とせざるをえない。英語は「コミュニケーションの手段」としての側面を重視し、「客観的把握」を主としたため、モダリティにおいても、内在的なデオントリックなとらえ方が無標となり、エピステミックなとらえ方は有標なとらえ方となった。しかし本質的には両者は同じ事態に対する異なる二つのとらえ方である。それゆえ英語などの言語では、一つの法助動詞にデオントリックとエピステミックの両方の意味用法を有するようになっていく。それは両者が同じ事態をとらえる2種類のとらえ方の選択の問題であるからである。

では日本語はどうであろうか。上述したように日本語では「思考の手段」としての側面を優先し、「主観的把握」を選んだ。つまり外界の事態をまずは話し手である私の視点から、表面的、外在的にとらえるのを無標なとらえ方とした言語である。

日本語は他の言語に比べ、とりわけ「話し手からの見え」を重視しており、主観的把握の傾向が強い。それは客観的、本質的把握からの表現がしにくいことをも意味する。その結果、日本語にはデオントリックなモダリティ表現自体が発達しにくい状況を作り出した (黒滝2005)。日本語では推量の助動詞など、エピステミックなモダリティを表す表現が多いのに比べ、デオントリックなモダリティを表す助動詞が少なく、*must* に相当する必然性は「なければならない」、*may* に相当する可能性は「てもよい」といった話し手が判断したことを色濃く示した表現を用いなければならないのも、デオントリック表現が未発達であること

をよく表している。

モダリティ以外の例を挙げよう。日本語では、「話し手の視点」で事態をとらえるため、「話し手からわかること」と「話し手からはわからないこと」とを明確に区別して表現する。たとえば、感情形容詞は(3)~(5)のように1人称主語にのみ用いられ、3人称主語には用いられない。

(3) (私は) 悲しい。

(4) 彼は悲しがっている。／悲しそうだ。

(5) *彼は悲しい。

この点は中立的、本質的な視点で事態をながめる客観的把握型言語の英語とは大きく異なっている。

英語の感情形容詞を用いた表現では(6)、(7)のように、他人の心をも見透かしてしまい、自身の心と同様に表現する。日本語のとらえ方を「私(人)の目」からのとらえ方であるとすれば、英語は超越的視点であり、いわば「神の目」からのとらえ方である。

(6) I am sad.

(7) He is sad.

このほか、格標識の決定のしかたにおいても、日英両語のこのような「把握の内蔵性」の違いが反映していることが、森山(2008: 35-43)で述べられている。それによれば、英語は事態の「動力連鎖」という内在的な側面に注目して格標識を決定する傾向が強いが、日本語は事態に対する「話し手の見え」という外在的な側面を中心に認識的に格標識を決定する傾向があるとしている。

また森山(2007)では、英語のofの連体修飾は動力連鎖など、内在的(intrinsic)な関係が求められる(Langacker 2000)のに対し、日本語のノの連体修飾では話し手の認識による「語用論的推論」で結ばれた関係が多く含まれるとしている。例えば英語ではthe brown spot of my lawnとは言えず、the brown spot in my lawnとなるが、これはspotとlawnとの間に内在的な力の関係がないからであるという(Langacker 2008: 75)。この場

合、日本語なら「うちの芝生の茶色の斑点」とノを使用することが可能である。さらに森山(2007)では、このような傾向は日英の連体修飾全体にも言える傾向であり、英語の連体修飾関係では動力連鎖などの内在的な関係が求められるのに対し、日本語の場合には「話し手の推論」という外在的な関係のみで連体修飾関係が結べることを意味している。

このように日本語では外在的な話し手の視点に立って言語化を行う傾向が強い。そして「話し手からわかること」と「話し手にはわからないこと」とを区別し、話し手にわかる事態はモダリティを用いない表現で表し、話し手には直接わからない事態に対してはモダリティ(エピステミック・モダリティ)を用いた表現で表す。

5. モダリティとその習得

Tomasello(2003)は、母語習得の過程においては一般に、デオンティック用法の習得は2歳ごろであるのに対し、エピステミック用法は4歳ぐらいにならないと習得されないという。しかしChoi(1991)によると、日本語と似た韓国語の母語習得のプロセスでもエピステミックの用法が早く、2歳ごろから習得されることが述べられている。客観的把握を主とする言語では、内在的な見方を無標とし、その結果、デオンティック用法が頻繁に用いられるために、その習得が早く、主観的把握を主とする日本語のような言語では外在的な見方を無標とするため、エピステミックな用法が頻繁に用いられ、その習得が早くなるのかもしれない。ただしここで韓国語は日本語と似ていると言ったが、実際韓国語のモダリティ体系は日本語に比べると、部分的に英語のそれに似た側面をも有しており、日本語の母語習得において、エピステミックの用法が早いかどうかについては、さらなる研究が必要であろう。

6. 日英両語の言語類型論的特徴とモダリティとの関係

以上、日英両語の言語類型論的特徴とモダリティとの関係について、両語を対照しながら述べてきた。本稿で示された両言語のモダリティの違いは以下の3点である。

①英語のモダリティは事態を内在的にとらえた「デオンティック型」で、デオンティックの用法が中心であるが、日本語のモダリティは事態を外在的にとらえた「エピステミック型」で、エピステミックの用法が中心である。

②英語のモダリティは1つの語形でデオンティック用法とエピステミック用法との両面を有しているが、日本語のモダリティでは必ずしもそうではなく、特にデオンティック用法はあまり発達していない。

③英語のモダリティの習得はデオンティック用法が早く、エピステミック用法の習得は遅いが、日本語の場合はそうでない可能性がある。

そしてこれら日英両語のモダリティの特徴の違いは、第一に、外界の事態を主観的に把握するか客観的に把握するか、第二に、事態を〈ナル〉的にとらえるか、〈スル〉的にとらえるか、といった2通りの言語類型論的特徴と密接に関わりあっていることも示された。

英語をはじめとした欧米語のこれまでのモダリティ研究においては、日本語などのモダリティの研究が含まれることは少なかった。一方、日本語のモダリティ研究はこれまで、国語学の流れの延長線上において独自性を維持しつつ行われる傾向にあった。このように日英のモダリティ研究はそれぞれ関わりあうことなく独自の発達をしてきた。このようなことがモダリティの習得は「デオンティックからエピステミックへと向かう」という説を浮上させる一因ともなっていた。

このような中、日本語のモダリティ研究と英語のモダリティ研究とを結びつけて対照し、日本語

のモダリティの言語類型論的な特徴を明らかにするとともに、モダリティの習得が必ずしもデオンティックからエピステミックへと向かうとは限らないことを、日本語を例に挙げ、明らかにしたのが黒滝(2005)であった。このようにそれぞれの言語のモダリティの特徴をより深く明らかにしようとするれば、今後、日本語のような欧米語とは性格を異にする言語をも含め、対照言語学的な観点、または言語類型論的な観点から言語横断的(cross-linguistic)に行うことも1つの方法であると言えるであろう。

7. 第二言語教育への示唆

最後に第二言語におけるモダリティ教育への示唆を述べる。日本語母語話者に対する英語教育や、英語母語話者に対する日本語教育において、モダリティに関し、本稿で述べたような言語類型論的特徴の違いが述べられることは少ない。しかし第二言語習得においては母語と第二言語の間に概念化やとらえ方などの違いがあることに学習者が気づかないことがある。そのような場合には教師がそれを気づかせてあげることも必要であろう。例えば英語を母語とする学習者に対する日本語教育において、日本語のエピステミック用法をデオンティック用法にも用いることができるか、注意すべきであることはその1つであろう。

また、王(2007)は中国語の「一定」と日本語の「きっと」とは、同じようにデオンティックな意志・依頼用法とエピステミックな推量用法があるが、中国語の「一定」では前者がプロトタイプであるのに対し、日本語の「きっと」では後者がプロトタイプになる。このような違いに学習者が気づかない場合、中国人日本語学習者が「きっと」を意志・依頼用法には用いるが、推量用法には用いない可能性がある。また日本人中国語学習者では逆のことが起こることも考えられる。このような誤りは、両者のモダリティの言語類型論的な特

徴の違いを学習者に気づかせることで解決できるであろう。

このようにデオンティック型言語を母語とする学習者がエピステミック型言語を学習する場合、もしくはエピステミック型言語を母語とする学習者がデオンティック型言語を学習する場合に、それらの違いに教師が気づかせてあげることが必要であろう。世界の言語を見渡した場合、日本語のようなエピステミック型言語は多くない可能性がある（類型論的に日本語と近いと言われる韓国語も日本語同様に「エピステミック型」ではあるものの、日本語に比べれば「デオンティック型」の様相を部分的に有している）。であるとすれば、とりわけ第二言語としての日本語教育において、日本語のモダリティのエピステミックな用法の習得を強化する、もしくは日本人を対象とした外国語教育においてデオンティックな用法の習得を強化することは重要であろう。

〈参考文献〉

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化へのタイポロジーへの試論—』大修館書店
- 池上嘉彦 (1982) 「表現構造の比較—〈スル〉的な言語と〈ナル〉的な言語—」『日英語比較講座4：発想と表現』大修館書店
- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』講談社
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚』NHKブックス
- 井上優 (2002) 「「言語の対照研究」の役割と意義」国立国語研究所『日本語と外国語との対照研究10 対照研究と日本語教育』3-20.
- 王冲 (2007) 『認知言語学的観点を取り入れた陳述副詞「きっと」「必ず」の意味研究—日本語教育のために—』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本文学専攻博士学位論文
- 黒滝真理子 (2005) 『DeonticからEpistemicへの普遍性と相対性：モダリティの日英語対照研究』くろしお出版
- 森山新 (2007) 「認知言語学的観点による日本語の連体修飾研究—連体修飾節・ノを用いた連体修飾を中心に—」『日本学報』72:41-58.
- 森山新 (2008) 『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得：日本語教育に生かすために』ひつじ書房
- 森山新編 (2008) 『認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究最終報告書』(平成17~19年度科学研究費補助金研究基盤研究(C)、課題番号17520253、研究代表者: 森山新)
- 森山新他 (近刊) 『日本語教師のための応用認知言語学』凡人社
- Biber, D., Johansson, S. Leech, G., Conrad, S., and Finegan, E. (1999) *Longman grammar of spoken and written English*. London: Longman.
- Choi, S.(1991) Children's answers to yes-no questions: A developmental study in English, French, and Korean. *Developmental Psychology* 27(3), 407-420.
- Langacker, Ronald W.(2000) The meaning of of. *Grammar and Conceptualization.*, 74-90. Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ponal W.(2008) Cognitive grammar and language instruction. Robinson, P. and N. C. Ellis(eds.)*Handbook of Cognitive Linguistics and Second Language Acquisition.*, 66-88. New York: Routledge.
- Tomasello, M.(2003) *Constructing a Language: A Usage-based Theory of Language Acquisition*, Cambridge, MA: Harvard University Press.